平成23年度

オンリーワンスクール

推進事業(3年次)

研究開発校　報告書

■ スクール・カルチャー「能楽」の取組
■ 加茂湖自然再生を考える取組

新潟県立佐渡中等教育学校

あ　い　さ　つ

県立佐渡中等教育学校
校長　　竹内　正文

佐渡で唯一の中高一貫教育校である本校では、地域の皆様の厚い期待のもと、平成２０年４月に開校し４年を経過いたしました。この間、「佐渡の歴史と文化に誇りを持ち、豊かな人間性と知性を身に付け、世界的視野で活躍できる人間の育成」という学校教育目標のもと、６年間のゆとりの中で、確かな学力の育成とともに、とりわけ郷土を愛し地域に貢献する態度と資質の育成に努めてまいりました。

そのための具体的な教育活動として、地域の人材等を活用し、佐渡についての自然・歴史・文化を体験や見学を通して学ぶ「佐渡学」を総合的な学習の時間の中に位置づけ、全校生徒で学習しております。スクール・カルチャー「能楽」と加茂湖自然再生の取組の参加という、オンリーワンスクールの取り組みは、その中核をなしています。校内外での発表や体験活動を通じて、保護者や地域にも知られるようになり、また一定の評価を受けるようになってまいりました。

スクール・カルチャー「能楽」では、前期生が全員で１年次から能の歴史を学び、謡を練習し、各学年ごとに校内外でその成果を発表しています。本校の特色ある取組として今後とも継続していくつもりでおります。

加茂湖自然再生の取組の参加は、科学部や生徒全体の環境学習を兼ねた体験活動として、今年度からさらにフィールドワークとしてリニューアルされ、「加茂湖エコワーク」として行っています。大学の研究者や専門家と連携した活動をすることで、単なる体験活動に留まらない取組とし、生徒一人ひとりが佐渡の環境保全について考える機会としています。職員にとっても大学の先生や専門家と協議をする中で、生徒の活動の見直しをして、取組内容を発展させてきています。

特色ある学校作りを進める本校は、「オンリーワンスクール推進事業」研究開発校に指定され、今年度は３年目にあたりますが、ここに今年度の取組を中心にその報告をいたします。

終わりに、この事業を推進するにあたり、ご尽力いただいた多くの皆様方に深く感謝申し上げ、あいさつといたします。

郷土愛

郷土を愛し
地域に貢献する態度の育成

目　次

1　あいさつ

3　フォトグラビア
　Ⅰ　本間家定例能
　Ⅱ　学習発表会
　Ⅲ　加茂湖エコワーク

8　オンリーワンスクール推進事業とは
　Ⅰ　オンリーワンスクール研究開発校
　Ⅱ　当校のオンリーワンスクール推進事業設定の背景
　Ⅲ　研究内容
　Ⅳ　スクール・カルチャー「能楽」
　Ⅴ　加茂湖自然再生を考える取組
　Ⅵ　期待する成果

10　オンリーワンスクール推進事業（３年次）の活動概要
　Ⅰ　コンセプト
　Ⅱ　取組状況
　Ⅲ　主な成果
　Ⅳ　今後の課題

29　他校への伝播
　Ⅰ　取組状況
　Ⅱ　掲載記事

31　編集後記

CATCH THE WAVES!

オンリーワンスクール　フォトグラビア

◎馬場あき子先生講演会　能楽発表　（平成 23 年 4 月 23 日）

◎平成 23 年度　本間家定例能

～新潟県立佐渡中等教育学校 「素謡　紅葉狩」出演　（平成 23 年 7 月 31 日　本間家能舞台）

◎学習発表会　スクール・カルチャー「能楽」披露

（平成 24 年２月 24 日）

３年生「舞囃子　羽衣」

◎加茂湖エコワーク　～加茂湖自然再生を考える活動～

伝統漁法コース

①

②

③

④

⑤

①湖畔まで移動。

②地元の方のお話を伺う。

③手作り竹製の釣り竿でヒット！

④短パンをたくし上げてアサリ採り。
　カキも見つかりました。

⑤テグスの仕掛けも手作りで。

生物調査コース

⑥説明してくれる方に挨拶。

⑦湖畔付近で説明を聞き、活動の準備。

⑧「こごめのいり」の生物を探す。

⑨地引き網を引くと、そこには！！

⑩田んぼの用水路では、湖とは違った
　生態系が見られる。

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

一目入道コース

⑪

⑫

⑬

⑭

⑪入道が祀られているお堂に集合。

⑫説明を聞き、オリジナルの紙芝居を
　作成。

⑬12 枚一組の紙芝居を発表。

⑭カラフルに仕上がった力作！

⑮帰り道では、沿道のゴミ拾いも実施。

⑮

トキ野生復帰コース

⑯

⑯トキ野生復帰センターで、トキ飼育の現状を伺う。

⑰実物のトキの羽根。トキ色。

⑱トキの卵の大きさは！？

⑲巣作りのために枝を折る作業。

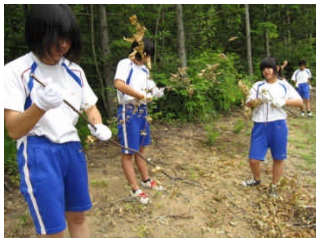
⑳トキのためにせっせと作業。

⑰

⑱

⑲

⑳



トキビオトープコース

㉑

㉒

㉓

㉑休耕田の使い方についての説明。

㉒堅い田んぼを掘り起こす

㉓田んぼの中にはいろんな生き物が！

㉔みんなで列を作って馴らしていく。

㉕参加者全員で「トレイン・トレイン」！

㉔

㉕

カキ養殖コース

㉖

㉖佐渡市のゴミの現状を伺う。

㉗水を浄化する施設にもカキ殻が利用されている。

㉘カキ殻再利用の方法を学ぶ。

㉙カキ養殖の筏のミニチュア作り。

㉚完成した筏。

㉗

㉘

㉙

㉚

オンリーワンスクール推進事業とは

Ⅰ　オンリーワンスクール研究開発校

児童生徒がより主体的に学校を選択することができるよう、全ての県立高等学校、県立中学校および県立中等教育学校が自校の魅力をより一層明確にしたオンリーワンの学校づくりを推進するにあたり、パイロット的な役割を担う学校を「オンリーワンスクール研究開発校」として指定し、取組内容や成果を他校に伝播できる特色ある取組を支援することで、本県の高等学校教育および中高一貫教育の活性化に資するのが、この事業の趣旨である。

一昨年度から本校を含め１２校（平成 23 年度は 13 校）が研究開発校に指定され、今年度も継続して研究開発校として取り組んでいる。

Ⅱ　当校のオンリーワンスクール推進事業設定の背景

現在、佐渡島では、少子高齢化が進む一方で、若者層の島外への流出による人口の減少が 大きな課題となっている。佐渡で生まれ育った生徒たちではあるが、郷土の伝統文化、歴史、自然に恵まれた環境にある佐渡の魅力を知らないまま島外に出てしまうことも多い。佐渡島で唯一の中高一貫教育校である本校では、６年間のゆとりの中で、確かな学力の定着はもちろん、佐渡の魅力に気付かせるとともに、佐渡の抱えている課題についても考えさせ、郷土を愛し地域に貢献する態度の育成を目指している。そのため、総合的な学習の時間で「佐渡学（佐渡の自然、歴史、文化を学ぶ学習や体験活動）」を充実させている。中でも、開校時から進めているスクール・カルチャー「能楽」の取組と加茂湖水系再生プログラム事業を活かした加茂湖自然再生の取組はオンリーワンの取組である。

Ⅲ　研　究　内　容

特色ある教育課程の開発や特色ある教育活動の研究に取り組み、その取組状況や成果等を他の学校や地域に広く伝播する。なお、指定終了後も継続した取組が行えるような研究を行う。

本校では、特色ある教育活動の研究として、次の２点に取り組む。

１　スクール・カルチャー「能楽」の取組

２　加茂湖自然再生を考える取組

Ⅳ　スクール・カルチャー「能楽」

１　主な活動

(1) 昨年度に引き続き、総合的な学習の時間に、全校生徒で能楽を学ぶ。謡の練習を通して、伝統芸能「能楽」に親しみ、声の出し方や礼法なども併せて学ぶ。

(2) 佐渡で行われている本物の「能楽」を見学、鑑賞する。（１・２学年）

(3) 学習発表会等で「能楽」の謡（１～３学年）を披露する。

2　スクール・カルチャー「能楽」のねらい

(1) 佐渡の伝統芸能である「能楽」を全校生徒で学び、佐渡の文化について知るとともに、礼儀を身に付ける。

(2) 能楽の謡をマスターし、能楽の発表会等を行い、本校の取組をアピールするとともに、佐渡への愛着を醸成する。

Ⅴ　加茂湖自然再生を考える取組

1　主な活動

(1) 「ローカル・コモンズ再生研究所（＊)」と連携し、加茂湖の自然再生の研究を学ぶ。

(2) 「加茂湖エコウォーク」を行い、身近な加茂湖の環境を知り、自然再生の取組を大学関係者や行政、漁業関係者等から学ぶ。

＊「ローカル・コモンズ」とは、河川、湖沼、海岸、森林、湿原、棚田など、地域が持続的に維持管理してきた空間と管理のための社会的装置（しくみ、伝統、文化など）を指し、地域共同管理空間と訳しています。

「ローカル・コモンズ再生研究所」は、危機的な状況にあるコモンズを再生し、地域社会を活性化するための思想、技術、理論を実践的な取組を通して明らかにすることを目標にして活動をしています。現在、東京工業大学・九州大学・兵庫県立大学が協力しながら、哲学・工学・社会学の視点から研究を進めています。

2　取組のねらい

(1) この事業に参加し、自然豊かな佐渡を愛する心を育成するとともに、佐渡の環境問題について考える力を付ける。

(2) 大学や研究機関と連携して活動することを通して、大学への関心を高めると共に専門的な学びや研究方法を身に付ける。

Ⅵ　期待する成果

1　故郷佐渡の魅力を実感した生徒たちが、将来、佐渡や新潟、日本を担う人材に成長し、地域を支える人材となることを期待している。佐渡の伝統芸能である「能楽」を学ぶことは、地域理解と地域貢献につながる。国内だけでなく、今後予定されているプナホー学園との交流や国際交流の場でも佐渡や日本の文化等を自信をもって発信する力を付けさせ、教育目標にある「世界的視野で活躍できる人材の育成」につなげていきたい。

2　大学や研究機関と連携した活動を通して、進路に対する目的意識の向上と学習への動機付けを図る。キャリアガイダンスとしての一面と研究の進め方やより専門的な学習の仕方を学ぶ機会になると考える。大学や大学生、研究機関と関わりをもつことは、大学のない佐渡島では大きな意味を持つ。また、自然再生に向けた社会的なプロジェクトとして日本の最先端の研究に参加しながら佐渡の環境の現状を見つめ直し、佐渡への愛着と科学的な思考力も高めたい。

オンリーワンスクール推進事業（３年次）の活動概要

Ⅰ　コンセプト

Ｃａｔｃｈ　ｔｈｅ　ＷＡＶＥＳ！　（将来の夢をかなえる波をつかもう）
～知性・人間性・郷土愛を育みながら、大きな成長へ～

【解　説】

「Ｃａｔｃｈ　ｔｈｅ　ＷＡＶＥＳ！」は本校の校是である。（夢を叶える波をつかめ！）という意味。ＷＡＶＥＳには、次のような意味を込めている。

Ｗ＝Ｗｉｓｄｏｍ　　（自ら高める「英知」）
Ａ＝Ａｓｐｉｒａｔｉｏｎ　（夢をえがく「大志」）
Ｖ＝Ｖｉｔａｌｉｔｙ　　（たくましく生きる「活力」）
Ｅ＝Ｅｍｏｔｉｏｎ　　（豊かな心を育む「感動」）
Ｓ＝Ｓｔｕｄｅｎｔｓ，Ｓｃｈｏｏｌ、Ｓａｄｏ（生徒、学校、佐渡）

波がうねりになり、夢が広がることをイメージしている。
佐渡の恵まれた自然や文化の中で、本校の運営方針の３つのキーワード、「知性」「人間性」「郷土愛」を育みながら、世界的視野で活躍できる人材の育成を目指している。
その中でもこの事業では特に、郷土愛を育むことに焦点をあてて、特色ある活動を進めている。

Ⅱ　取　組　状　況

１　スクール・カルチャー「能楽」の取組

(1)　４月１１日～４月２３日　「能楽」（３年生）の練習

・講師（神主弐二氏）を招き、馬場あき子先生講演会での能楽披露に向けて、３年生の練習を再開。

(2)　４月２３日　馬場あき子先生講演会で能楽披露

・本校の校歌の作詞者であり、能楽に造詣の深い馬場あき子先生をお招きし、「世阿弥の佐渡で～校歌に託した思い～」と題して、ご講演をいただいた。
・３年生がスクール・カルチャーの紹介として、「舞囃子・胡蝶」を披露した。
・生徒の能楽発表に感激し、馬場先生からお返しの舞があり、会場は大拍手に包まれた。
・全校生徒、保護者、馬場先生の関係者合わせて約５００名が、生徒の校歌紹介・舞囃子、馬場先生の講演・舞に酔いしれる感動の会になった

(3)　６月２日～７月３１日　「能楽」（１・２年生）の練習

・講師（神主弐二氏）を招き、１年生は学級ごと、２年生は学年単位で謡を練習。

・１年生は入門として、能の歴史や「羽衣」を学習。２年生は「紅葉狩」を練習。

(4)　７月３１日　本間家定例能への出演、鑑賞

・２年生全員が本間家能舞台に上がり「連吟・紅葉狩」を披露した。

・１年生は２年生出演の「紅葉狩」とその他舞囃子や仕舞を鑑賞、本物の能に触れる。

・個人的に能楽を習っている生徒、職員も能楽を披露した。

(5)　９月２２日　韓国中学校との交流会で能の一部を披露

・県中学生訪韓研修団に参加した生徒１３名が、韓国・華渓（ファゲ）中学校との交流で「羽衣」の一部を謡で紹介した。

(6) １２月８日～２月２３日　「能楽」の練習再開

・「学習発表会」に向けて、再び謡の練習を学年ごとに始める。週に２～３時間程度のペースで練習を重ねていった。発表会前日には申し合わせ（リハーサル）を行い、２・３年生は囃子（笛・小鼓・大鼓・太鼓）と合わせて練習を行った。

(7) ２月２４日　学習発表会で「能楽」披露

・１年生は「連吟・羽衣」「連吟・鶴亀」を披露
　２年生は「舞囃子・胡蝶」を披露
　３年生は「舞囃子・羽衣」を披露

・保護者や地域の方が多く集まり、各学年の「能楽」発表を鑑賞した。

・どの学年も練習の成果を存分に発揮し、最後まで一生懸命に謡いきった。

2　加茂湖自然再生を考える取組

(1) これまでの取組と本年度の取組の違い

本年度で 3 回目の実施となったこの行事であるが、昨年までは地域の清掃活動を主体としたウォーキングと、各コースのチェックポイントにおける講義という、いわば“聴講型”の活動を合わせたものであった。年々生徒数が増加すること・マンネリ化を防ぐという観点から、毎年のように活動内容に改善を加えてきており、過去 2 回は、コースの増設などのマイナーチェンジを行ってきた。しかし、本年度は大幅刷新を敢行し、主目的を“体験型”のフィールドワークとし、実体験を通して郷土の文化・歴史に触れることを目指した。タイトルは『加茂湖エコウォーク』から『加茂湖エコワーク』へと変更、コースも趣向を凝らした 6 種類を設定し、全校生徒で郷土を多角的に見つめることとなった。

(2) 本年度の取組

本活動は、東京工業大学大学院桑子研究室・兵庫県立大学豊田先生・加茂湖水系再生研究所（通称カモケン）・加茂湖漁協・地域自治体など多くの関係機関の御協力をいただいている。加えて本年度は、ハワイ大学で教育学を研究されているトーマス・ジャクソン博士とベンジャミン・ルーキー博士にもご参加いただいた。まずは全体で談義を行った後、以下に示すような各コースに分かれ、それぞれに加茂湖やその周辺における地域にまつわるフィールドワークを行った。地域の専門家や参加した大学院生などの指導・説明のもと、生徒は熱心に活動し、それぞれに新しい経験を得たようであった。また、集合場所までの道中にはゴミ拾いも実施し、これまで同様、地域の美化活動も兼ねることができた。

①７月２２日　エコワーク事前談義

・事前にグループ分けを行い、班長・参加コース等を決定した。

・エコワーク実施前日、参加いただく関係各位にご出席いただき、集中談義を実施した。まずは全体会で講師陣よりあいさつがあり、質疑応答なども活発に行われ、会場は和やかで前向きな雰囲気に包まれた。

・その後各活動班に分かれ、昨年のふり返り、今年の目標や目的などを、班長を務める３年生を中心に行った。ここでも当日ご指導いただく方よりお話があり、自分たちのコースに対する興味を深め、翌日のエコワークに向けた意識付けをすることができた。

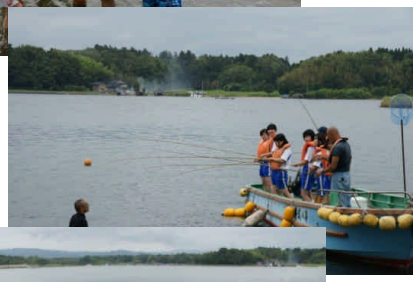
②７月２３日　加茂湖エコワーク

＜コース別の活動紹介＞

【ア】伝統漁法体験コース

・バス・徒歩での移動で、加茂湖畔まで移動し、地元漁協の方より、加茂湖の性質、現在の漁業の状況、ご自身が子どもだった頃の加茂湖の様子や、そこで遊んだ記憶などについての話を聞いた。

・その後、二手に分かれて、昔ながらの方法での漁を体験した。細竹を炙ったものにテグスを通しただけの簡単な釣り竿に、浮きの替わりも竹の枝、エサは加茂湖に潜って採ったアサリをつぶしたものやイソメなどを用いた釣りを行った。生徒の数人は初めての釣りということであったが、一降り目から当たりがあったり、引き上げたらエサだけ食べられていたりと、しっかりと体験することができた。



　また、湖底の砂をさらってアサリを採った。体操着をたくし上げ、裸足で加茂湖に入るという体験も初めてであったが、すくい上げた砂の中にアサリやカキがみつかると歓声が上がった。水着に着替えて泳ぐ生徒もおり、思い思いに加茂湖での“遊び”を楽しんだ。なお、釣果のアサリやカキを持ち帰る者もいた。

・生徒の様子を見ていた漁師の方が漏らした、「加茂湖で子どもの遊び声が聞こえるのも久しぶりだな」との言葉と、懐かしそうな笑顔が印象的であった。

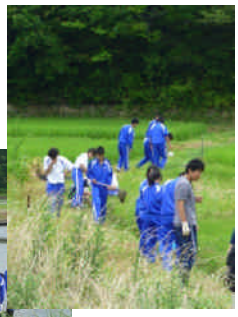
【イ】生物調査コース

・まずはバス・徒歩での移動で観察場所である「こごめのいり」へ移動し、レクチャーを受けた後、田んぼや水路に生息する生物を調査するグループと、湖に生息する生物を調査するグループに分かれて活動を開始した。

・田んぼや水路のグループでは、手網を使ってドジョウや沢ガニから、ここにしか生息しない新種のカエルなど、珍しい生物を観察することもできた。田ん

ぼに入って泥まみれになるということも含め、貴重な体験となった。身近な自然の中にも、多くの生物を確認し、自然の大切さを再認識させられることになった。

・湖調査のグループは、実際に漁に用いることもあるという地引き網を使用し、水中に生息する生物を採取した。加茂湖は汽水湖なだけあり、淡水魚と海水魚のどちらも観察することができた。比較的大きな魚からタニシまで、多様な生物を観察し、加茂湖特有の姿を感じることができたのではないだろうか。



【ウ】一目入道コース

・加茂湖畔のお堂に祀られているという伝説の妖怪・一目入道について学ぶコースである。

・お堂に着くと、講師の先生方が手作りの紙芝居やユニークな人形を使い、一目入道にまつわる伝説を説明してくださった。その後、生徒は少人数のグループに分かれ、協力しながら 12 枚 1 組の紙芝居を制作した。

・一人が 1 枚を担当し、絵はもちろんのこと文章まで 1 から制作した紙芝居は、全て合わせてみると文章が前後で噛み合っていなかったり、絵がずれていたりと大変であったが、内容のずれとは逆に、他学年の生徒同士の絆はぴたりと深まったようであった。加茂湖や佐渡の環境とこの伝説の関わりについて、講師から得た知識に自分たちなりのエッセンスを加えたオリジナルの紙芝居を発表し、各自、理解が深まったようである。

・ちなみに一目入道は、漫画「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な水木しげるさんの漫画にも登場している。

【エ】トキ野生復帰コース

・まず、佐渡市新穂地区のトキ野生復帰センターにて、トキに関する様々なことを学んだ。実際のトキの羽根や卵も見せてもらったが、この羽根の譲渡や売買は法に触れるとのことであった。

・現在、トキ野生復帰センターで飼育された数羽のトキが放鳥されているが、そのトキがスムーズに野生に還ることができるように、巣作りなどの支援を行っているそうである。

・その支援の一環として、トキが巣を作りやすいよう

に、巣に使う木の枝の長さをそろえる作業を行った。野生復帰ステーションでは、まず人間がトキの巣をある程度作り、その後トキが巣を完成させているそうである。単純な作業ではあったが、トキのためになることが実感できた。

・作業後、うずたかく積み上がった木の枝を見ると、実際にトキの住まいになるという達成感・充実感を感じることができた。

【オ】トキビオトープコース

・このコースでは、放鳥されたトキのエサ場となるビオトープ作りを行った。ビオトープとはドイツ語で『エサ場』という意味で、最近は休耕田の再利用方法としても注目されているとのこと。

・お話を伺った後、数人のグループに分かれて実際にビオトープを作り始めた。水を張った田んぼはぬかるんでおり、何度も足を採られそうになる姿が見られた。

・土を掘り起こしていくと、シャベルも歯が立たないくらいの固さだった土から、オケラやミミズなど、どこにいたのかというくらいにたくさんの生物が出てきた。初めて目にする生物も多く、この作業の有効性を感じさせられた。

・仕上げとして最後に、参加者全員で列を作り、自分たちが耕した田んぼの土の上を歩き、土を踏み固めた。

・後日、今回整備したビオトープに放鳥されたトキが来訪したとの連絡が入り、参加者を大いに喜ばせた。トキの野生復帰の一助になったことが実感として得られ、大きな達成感が残った。

【カ】カキ養殖コース

・このコースでは、加茂湖の特産品であるカキの養殖の現状やカキ殻の再利用法に加え、佐渡市のゴミ処理の様子などについて学んだ。

・まず、両津クリーンセンターに集合した。佐渡市では人口が減り続けているのに対し、一人あたりのゴミの排出量が増えているというお話を伺い、改めてゴミを減らす必要性を感じた。

・その後、カキ殻処理工場へ向かい、カキ殻を処理する機械や再利用例を実際に見せていただいた。再利

用の方法などについても研究がされており、現在は水道水のろ過に使われている他、赤潮の発生を防ぐような実験も、実用化を目指して進められているそうである。

・最後にカキを養殖する筏を作った。実物の５分の１サイズということであったが、それでもかなりの大きさであった。筏に種ガキを結びつける紐の結び方は、水流などでは簡単にはとれないが、船の上からは簡単にとれるように工夫されたものであった。

＜解散式＞

・活動後には、保護者より冷たいスイカのご褒美があった。これを楽しみにして暑い中頑張ったこともあり、たくさんあったはずのスイカはあっという間になくなった。

・最後に、この日１日の反省を各コースの代表の班長が発表した。自分の参加コース以外の話を聞くことで、より加茂湖のことを深く知ることができた。

・講師の方々からも感想を述べていただき、次年度への意識を高めてこの日の活動は終了となった。

③１１月１９日　加茂湖環境フォーラムへの参加

・科学部の生徒が加茂湖環境フォーラムに参加し、加茂湖環境調査の結果や「加茂湖エコワーク」の活動を紹介した。

④２月２４日　学習発表会にて取組発表

（その他　フォトグラビア参照）

Ⅲ 主 な 成 果

1　スクール・カルチャー「能楽」の成果

(1) 馬場先生講演会後のアンケートより

Ｑ１．能楽披露を通して、ためになったことはどんなことですか？（３年生のみ）

ア	佐渡の伝統芸能にふれられた	２６人
イ	日頃練習している能を多くの人に見てもらってよかった	２０人
ウ	佐渡中等での取組を紹介することができた	１６人
エ	佐渡の伝統芸能を守ることに関われた	４人
オ	暗記力・集中力が向上した	４人
カ	その他（正座ができるようになった）	３人

Ｑ２．講演会を聞いて、ためになったことはどんなことですか？(%)

		１年	２年	３年	４年	全校
ア	校歌の歌詞の意味について理解を深めることができた	30	49	50	32	38
イ	校歌の歌詞のよさに気付き、愛着がもてるようになった	20	15	7	17	16
ウ	世阿弥の人生について理解を深めることができた	13	13	12	26	15
エ	世阿弥の人生・言葉が自分の人生の教訓になった	5	2	5	3	4
オ	世阿弥が生きた佐渡のよさに気付くことができた	14	7	9	12	12
カ	能の歴史について理解を深めることができた	8	11	14	8	10
キ	能のよさに気付き、能にやりがいを感じることができた	10	4	3	0	5

Ｑ３．能発表・講演を通しての感想

・とてもすごいと思いました。私も来年の能をがんばりたいです！！
・３年生はさすがだと思いました。声も大きいし、舞もきれいだし、スゴイと思いました。
・校歌には、馬場先生の思いと歴史が詰まっていて、とても感激しました。
・佐渡はいろいろな所の文化を取り入れて発展してきたと思いました。僕も佐渡のようにいろいろな文化や知識を自分に取り入れて成長していこうと思いました。

＊学年によって、講演内容や能への関心に違いが見られた。１年生にとっては初めて能を見た生徒がほとんどで、３年生（先輩）と迫力ある馬場先生の能楽に関心をもっていた。他学年も改めて能の歴史や世阿弥との関係、佐渡の歴史や文化について学ぶことができた。

Ｑ４ 馬場先生講演会の感想

・私は馬場先生の前で能を披露することになったとき、少し嫌だった。なぜなら、馬場先生は能のプロの方だから、もしかしたらきつい言葉を言われると思ったからだ。でも、中等の代表として、先生の前で披露しなければならないので、しっかりと練習をした。そして当日、その日は欠席が多く少し心配だった。あっという間に発表の時間になった。私はしっかりと自分で声を出すことができた。発表中、石平先生の顔が見えた。先生の顔を見たら、なにか緊張がほぐれた気がした。
　発表後、講演の中で馬場先生が３年生の能をほめてくれた。少しうれしかった。講演会の最後に、先生が能を披露してくれた。やっぱりプロの方は違うな、と思った。講演会で室町時代の世阿弥や足利氏の家系など、佐渡にかかわる歴史を学ぶことができた。そして、能についてまた少し興味を持てた。
　次は学習発表会で能をやることになると思うけれど、そのときは今までの能よりさらにLEVEL UPした能をしたいと思う。

(2)「本間家定例能」に参加しての感想

・　練習のときは全然声が出なかったけど、本番は大きな声が出せたのでよかった。能を発表したとき、いろいろな人が見に来ていて緊張したけど、間違えずにできた。能の舞台にたったとき、思ったよりも小さかったので驚いた。私より小さい小学生くらいの人たちも一人で大きな声を出していたので、すごいと思った。

最初、能を始めたときはお腹から声を出すことができなかったけど、少しは出せるようになったのでためになっているかなと思った。練習の回数は少なかったけど、しっかり発表できたのでよかった。

・　練習ではあまり声が出なかったけど本番は思いっきり声が出せたのでよかったと思います。短い時間で全部覚るのは大変だったけど、やり終えた後は楽しいと思えたし、達成感がありました。他の中学校ではできないことだと思うので、佐渡の伝統芸能にふれることで、いろいろとこれからも体験してみたいと思いました。

(3) 学習発表会後のアンケートより

Ｑ１　佐渡の伝統芸能の「能楽」を学ぶことは、佐渡のよさを感じるきっかけになっていると思いますか？

〈平成２３年２月実施〉

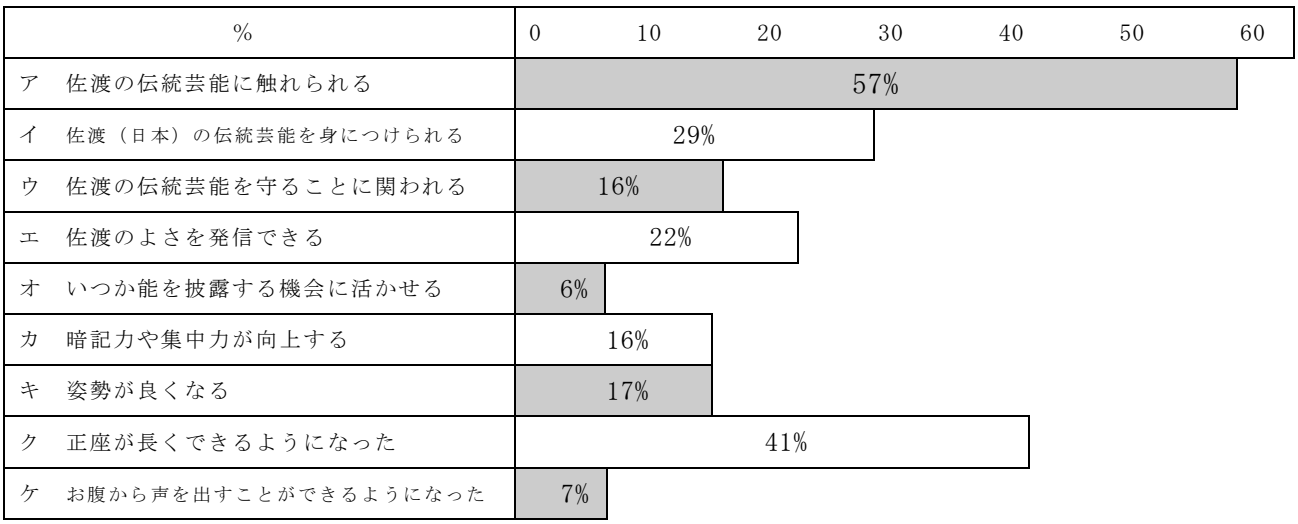
ア　なっている　39%	イ　どちらかといえばなっている　50%	ウ ７％	エ ２％

Ｑ２　スクール・カルチャーとして「能楽」を学習していることについて、どう思いますか？

〈平成２３年２月実施〉

ア　自分のために なっている　16%	イ　どちらかといえばためになっている　67%	ウ 10%	エ 4%

Ｑ３　「能楽」の学習をして、ためになっていることはどんなことですか。



Ｑ４　学習発表会を終えての感想

・　自分なりに大きい声が出せたと思う。最後の能の発表が良い形でしめくくれた。機会があったらまたやりたい。

・　今回が最後の全員で行う能の謡の発表でした。覚えるのはそんなに難しくなかったけれど、正座はやっぱりきつかったです。発表はよくできたと思います。３年間能をやっていて、能についてたくさん知ることができました。

・　もう少し声が出せたら、もっといい発表だったと思う。結局３年間やったけど、正座には

慣れなかったのが残念だった。けれど、少しでも佐渡の伝統に触れることができて、いい経験だった。

- 風邪で練習があまりできず、覚えるのが大変でした。本番前どうなるか不安だったけど、無事に終えることができたのでよかったです。途中、つっかえそうになったけどなんとか乗り越えることができました。
- 最初は声を出すだけで精一杯だったけどだんだんと声を出すことができるようになりました。佐渡の伝統芸能に触れられてよかったです。
- ２年生・３年生は囃子方がついての謡でかっこよかった。私たちは、謡だけだから、緊張したし、「少し声が小さかった」と自分でも思うし、間違えてしまうところもあった。
なので、２年生になったら、また、能の発表練習を一生懸命やって、発表も１年生にあこがれるような、かっこよく決まる発表にしたい。
- 練習のとき最初は、あまり声が出なかったし、音程もつかめず大変でした。でも、「羽衣」は、だんだんできるようになってきたけど、「鶴亀」が心配でした。でも、今日の発表で、「羽衣」はゆっくりできたし、声も出せたと思います。「鶴亀」は少しあいまいなところもあったけど最後まで謡えたのでよかったです。２年生になってもＳＣがあるのでしっかり声をだしてやりたいです。
- １年生は２種類も披露していたのがすごいと思った。２・３年生は長いのに暗記していたのですごいと思った。舞もいい雰囲気で踊れてて良かった。
- １年生は初めてにもかかわらずしっかりできていたと思います。２年生は舞囃子をつけての初挑戦の謡でしたが、よく合っていました。３年生は今までの経験が実って素晴らしかったです。
- 全学年、声も大きくて聞きやすかったし、きれいにそろっていて良かったと思います。今年の発表は全学年が素敵な発表でした。１・２年生は来年も今回の発表よりもいい発表ができるようにがんばってください！！

スクール・カルチャーとして「能楽」を学ぶことが、自分のためになっていると思う生徒が80％を超え、当初の目標を達成した。佐渡と能楽の関連を感じ、佐渡のよさに結びつけて　考えている生徒がほとんどである。スクール・カルチャーの取組が着実に浸透してきており、能楽を通して郷土佐渡への思いにもつながっている。

「能楽の学習をしていて、ためになったことはどんなことですか？」という問いに対して、「佐渡の伝統芸能にふれられる」「伝統芸能を身に付けられる」「佐渡の伝統芸能を守ることに関われる」等を実感している。能楽を学ぶことで、姿勢が良くなったり、長時間、正座ができる忍耐力が身に付いたという成果もある。そのことが、規則を守ることや落ち着いた 言動に結びつき、節度ある学校生活にもつながっているように思う。他にも「集中力や記憶　力が向上した」と感じている生徒もおり、学習面にもプラスの効果が現れてきている。

１期生の能楽発表を鑑賞していた２期生がよい刺激を受け、受け継いでいる。それに続く３・４期生も先輩たちの発表する姿を見て、スクール・カルチャー「能楽」に積極的に取り組む姿が見られた。佐渡中等教育学校の特色として築き上げられてきている。やりながらその意義を高め、発表する大変さと共にやりがいも感じている。前期生は能楽を学ぶことで、精神的にも大きく成長している。

平成２３年１１月１８日に新潟県立村上中等教育学校で行われた全国中高一貫教育校研究大会で、本校のスクール・カルチャー・「能楽」の取組について実践発表を行いました。全国各地から集まった２００名ほどの先生方に対して、本校の「能楽」の取組をアピールすることができました。以下はその発表原稿です。

郷土愛を育むための教育実践

スクール・カルチャー・「能楽」の取組

新潟県立佐渡中等教育学校

源田　洋平

１　はじめに

当校がある佐渡市は新潟県の西の海上に位置し、人口６万２９９８人、面積８５５Ｋｍ²、周囲２６２Ｋｍ、沖縄本島を除いて国内では１番大きな離島である。周囲は美しい海に囲まれ、北部には１０００ｍを超える大佐渡山脈、内陸部には広大な国仲平野が広がる。その豊かな自然を利用して、国際的なトライアスロンやマラソン大会が毎年開かれている。また、佐渡には古（いにしえ）の時代から、順徳上皇、日蓮聖人、世阿弥が配流され、能・狂言を初めとする京都の文化が広がった。

２　佐渡中等教育学校について

当校は、平成２０年春に開校した佐渡が島で唯一の公立中高一貫教育校である。生徒は島内全域から集まっており、「佐渡の歴史と文化に誇りをもち、 豊かな人間性と知性を身に付け、世界的視野で活躍できる人材の育成 」という教育目標の下、職員、生徒、保護者が一丸となって、活気のある新しい学校を築いている。「人間性」「知性」「郷土愛」の育成を教育目標の３本柱として、教育活動を展開している。現在、佐渡が島では高齢化が進む一方で、若者層の島外への流出による人口減少が大きな問題となっている。佐渡で生まれ育った生徒たちではあるが、郷土の伝統文化、歴史、自然に恵まれた環境など佐渡の魅力を知らないまま島外に出てしまうことが多い。当校では、中等教育学校のよさを活かし、６年間のゆとりの中で、①確かな学力の定着はもちろん、②佐渡の魅力に気づかせるとともに、佐渡の抱えている課題にも気付かせ、「郷土を愛し地域に貢献する態度の育成」、③交流や体験活動を通して、コミュニケーション能力を高めることを目指している。

３　佐渡中等教育学校の総合的な学習の時間

特に総合的な学習の時間で、地域の人材や素材、環境を活用した様々な体験活動や講演会、県内外への情報発信や交流に力を入れている。中でも、スクール・カルチャー・「能楽」の取組と加茂湖再生プログラムへの参加は当校の特色である。これらの取組が認められ、平成２１年度から３年間、中等教育学校では唯一、新潟県の「オンリーワンスクール推進事業」の研究開発校に指定された。今日は、郷土愛を育むための教育実践、スクール・カルチャー・「能楽」の取組について詳しく紹介する。

４　スクール・カルチャー・「能楽」の取組

＜ねらい＞

・能楽を全校生徒で学ぶことを通して、佐渡の文化について知るとともに、礼儀を身に付ける。

・能楽の謡をマスターし、発表会等を通して、自校の取組をアピールするとともに、佐渡への愛着を醸成する。

＜主な活動＞

・謡の練習を中心とした能楽の学習
・本物の能楽の見学・鑑賞
・学習発表会・能シンポジウムでの能楽（謡）披露

5　実践の概要

（１）能楽室の整備（平成２１年度）
・佐渡産の杉板を使用し、能楽室と体育館のどちらでも使用できる可動式の鏡板を制作。
・老松の絵は、日本画家渡辺富栄氏に依頼し、３カ月をかけて描いていただいた。

（２）謡の練習（６月～７月）
・宝生流師範神主弐二氏を講師に招き能楽を学ぶ。
・１年生は最初の授業で、能の大成者世阿弥が佐渡に流されてきたこと、佐渡奉行大久保長安が佐渡に能を広めたこと、島内には３０以上もの能舞台が現存することなど、能の歴史や佐渡との関わりについて学習する。
・授業はまず、正座することから始まる。
・初めは学級ごとに、徐々に学年ごとに「謡本」をもとに謡の練習

（３）本間家定例能への出演、鑑賞（７月末）※明治時代から１００年以上続いている
・２年生全員が能舞台に上がり、「紅葉狩」を披露。
・１年生は２年生の謡と宝生流の能を鑑賞。

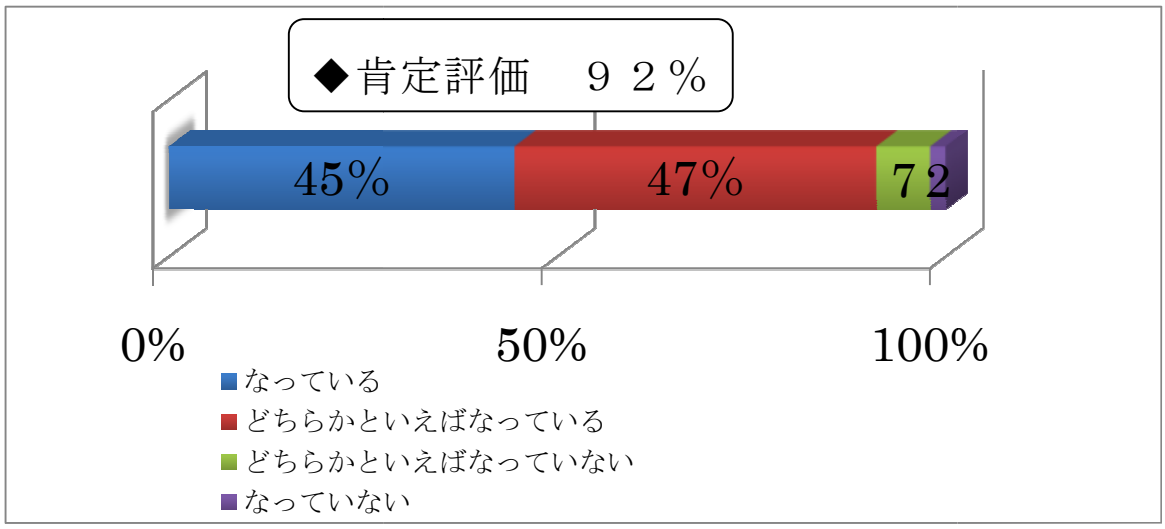
（４）能シンポジウムでの能楽披露（平成２２年度　８月）※新潟大学・佐渡市主催
・２年生全員が、能関係者・地域の方へ、「橋弁慶」を披露

（５）日韓中高生交流事業で「能楽披露」
・訪韓した佐渡中等生１４名がソウル市ヨンマ中学校訪問の際、「羽衣」の仕舞・謡を披露（平成２１年度　１０月）
・訪韓した佐渡中等生１３名がソウル市ファゲ中学校訪問の際、「羽衣」の謡を披露（平成２３年度　９月）

（６）学習発表会での能楽披露
・１年生は「連吟・羽衣」、２年生は「舞囃子・胡蝶」、３年生は「舞囃子・羽衣」
・体育館は静けさの中に、能の調べと仕舞、謡が響き渡り、参加者からは大きな拍手が送られた。

6　成果（学習発表会後のアンケートより）

Ｑ１　佐渡の伝統芸能「能楽」を学ぶことは、佐渡のよさを感じるきっかけになっていると思いますか。



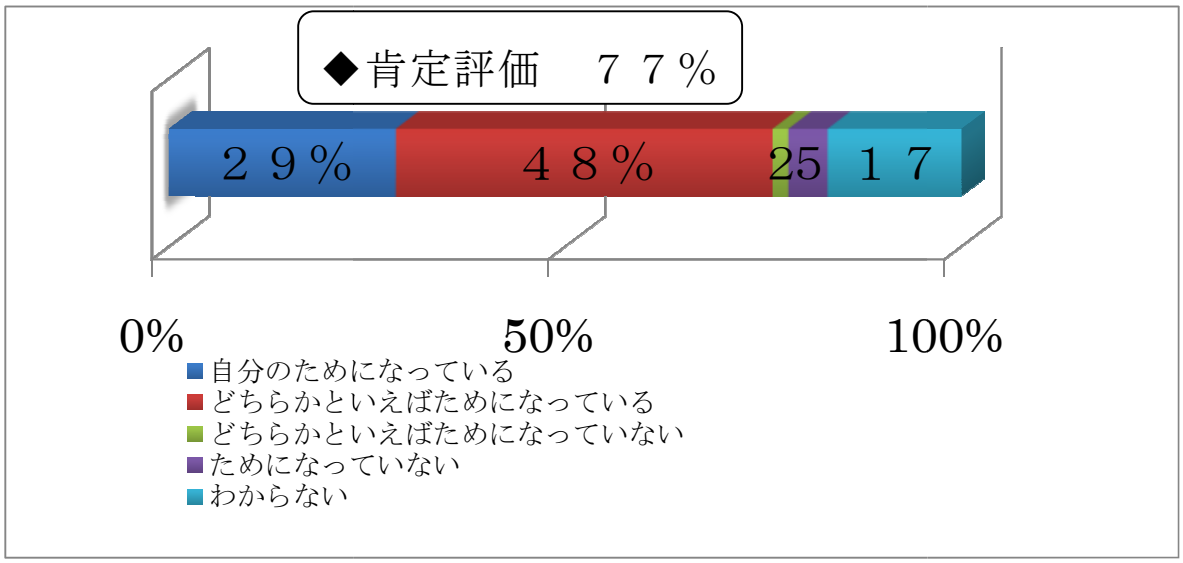
＜理由＞

・地元の伝統芸能を身近に感じ体験する良い機会だと思う。

・将来、もし外国人と交流するときなどに、日本にはこういう文化があることを教えられる。

佐渡と能楽の関連を感じ、佐渡のよさに結びつけて考えている生徒がほとんどである。スクール・カルチャーの取組が着実に浸透してきており、能楽を通して郷土佐渡への思いにもつながっている。

Ｑ２　スクール・カルチャーとして「能楽」を学習していることについてどう思いますか。



Ｑ３　能楽の学習をしていて、ためになったことはどんなことですか？

「佐渡の伝統芸能にふれられる」「伝統芸能を身に付けられる」「佐渡の伝統芸能を守ることに関われる」等を実感している。能楽を学ぶことで、姿勢が良くなったり、長時間、正座ができる忍耐力が身に付いたという成果もある。そのことが、規則を守ることや落ち着いた言動に結びつき、節度ある学校生活にもつながっているように思う。他にも「集中力や記憶力が向上した」と感じている生徒もおり、学習面にもプラスの効果が現れてきている。

7　今後の課題と展望

（1）課題

現在、総合的な学習の時間を使って、スクール・カルチャーである「能楽」を行っている。総合的な学習の時間が今後減少してくるので、スクール・カルチャーと他の総合の内容を見直したり、精選したりする必要がある。後期課程に入るとなおいっそうスクール・カルチャーは時間的に難しくなる。４年生以降はどのようにするか検討中である。能楽の発表をするにしても囃子方や講師の費用をどう確保するかが課題である。

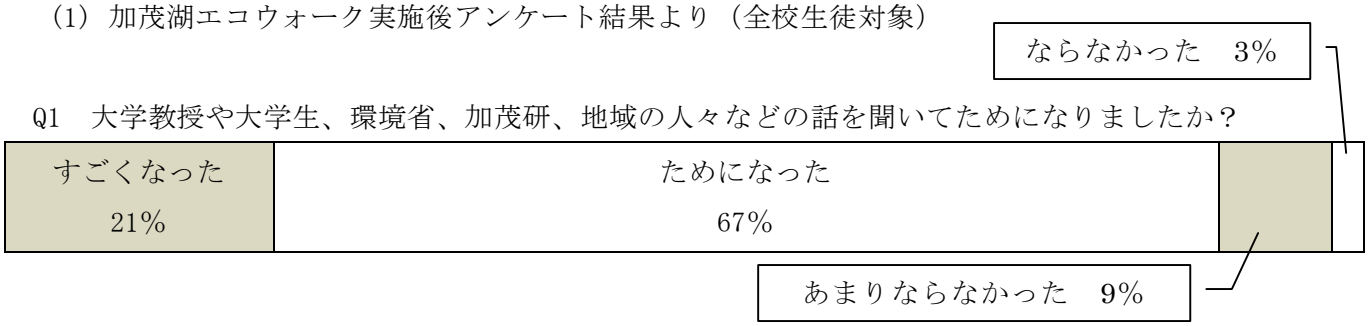
（2）展望

このスクール・カルチャー「能楽」を通して、故郷佐渡の魅力を実感した生徒達が、将来、佐渡や新潟、日本を担う人材に成長することを期待している。佐渡の伝統芸能である能楽を学ぶことで、地域理解と地域貢献につながることを期待します。また、様々な国際交流の場で佐渡や日本文化について自信をもって発信する力を身に付けさせ、教育目標に掲げる「世界的視野で活躍できる人材の育成」につなげていきたい。

2　加茂湖自然再生を考える取組の成果

(1) 加茂湖エコウォーク実施後アンケート結果より（全校生徒対象）

Q1　大学教授や大学生、環境省、加茂研、地域の人々などの話を聞いてためになりましたか？



Q2　大学や加茂研などが取り組んでいる加茂湖再生や佐渡市のゴミ処理について関心を持つことができたましたか？

Q3　大学や研究機関に関心を持つことができましたか？

(2) 生徒の感想（抜粋）

・トキのビオトープを作って感じたことは、人の力も使って大変なんだけれど、生き物のたく

さん集まる場所を作って自然はとても大切なんだと思いました。トキが増えるにはたくさんのエサ場を作らないといけないので、もっと増やした方がいいと思いました。今年が初めてのエコワークでしたが、やりがいがあったので来年もトキのビオトープ作りをやりたいです。

（トキビオトープコース　１年男子）

・ゴミを減らして自然を大切にして暮らしていきたいし、なるべく気をつけて佐渡の自然のためにエコを心がけて暮らすようにしたいです。それに佐渡のゴミが全国と比べて多いので、ゴミを減らすようにしたいなと思いました。

（カキ養殖コース　１年男子）

・環境のために自主的にゴミ拾いのボランティアをしたいと思います。ビオトープなど生き物のためになる物も作ってみたいです。今まで佐渡の環境について深く考えたことはありませんでしたが、これからはもっと佐渡の自然を守るための活動に取り組みたいです。

（トキ野生復帰コース　１年女子）

・加茂湖エコワークを体験してわかったことは、加茂湖や田んぼにはたくさんの生き物がいるということです。私は最初、加茂湖は汚いので生き物があまりいないと思っていました。しかし加茂湖には魚や貝などがいて、その近くの田んぼにも普段はあまり見ないような虫や生き物がたくさんいました。（中略）今まで見たことの無いようなたくさんの生き物とふれあう機会はなかなかないのですごく楽しかったです。そして佐渡の自然が今まで以上に大好きになりました。この大好きな自然をこれからも私たちの手で守っていきたいです。

（生物調査コース　１年女子）

・今回初めてカモケンというチームがあり、自然環境再生のためのプロジェクトがあることを知りました。佐渡について、トキや加茂湖について何も知らなかったことを恥ずかしく思いました。１人１人の活動は大切なんだなあと思いました。

（カキ養殖コース　１年男子）

・加茂湖でアサリがとれることを初めて知りました。アサリは水をきれいにするというが、それでも水が汚いということは加茂湖はかなり汚れているということだ。これからのエコワークできれいになると嬉しい。

（伝統漁法コース　１年女子）

・今回のエコワークで、妖怪は何らかの理由があっていることを知りました。ぼくは一目入道が安心していられるように、そして僕たちが住んでいる佐渡を美しくするために、なるべくゴミを出さないようにしたいと思います。

（一目入道コース　１年男子）

・今までは加茂湖のことを特によく知っていなかったし、ただ自分の中では「湖」とだけ感じていました。しかし今回改めて加茂湖に入ったり、新たな加茂湖の秘密を知ったりする中で、いろいろなことがわかってきました。たとえば海の中にはたくさんの生き物がいました。それらは昔から存在する大切な人間の宝物だったと思います。そんな歴史を今回のエコワークで深く知ることができてとても嬉しく思っています。これからも加茂湖にお世話になっているということを思って、大切に守っていきたいと思います。これまで以上に佐渡の自然を大切にし、来年のエコワークでは今回以上に進んで学習し、環境について理解していきたいと思います。

（伝統漁法コース　１年女子）

・両津クリーンセンターでゴミの処理について説明をしていただきました。佐渡は他の地域に

比べてゴミが多いというのを聞いてびっくりしました。また、不法投棄をする人が多いと言っていました。おととしの赤潮で約 8 割のカキが死んでしまったということも初めて知り、カキを養殖するのは大変なんだと思いました。初めて聞く話が多く、とてもいい体験をしました。

（カキ養殖コース　2 年女子）

・私たちはトキの巣作りの手伝いの作業を行いました。自分たちが行う作業が直接トキの役に立つなんてすごいと感激しながら行いました。トキや環境のためになることがわかりやすいと、やる気もすごく出ました。この作業をとおして、環境のために働くことの充実感と楽しさを初めて知りました。テレビなどで『環境を守るために動こう』などと呼びかけられても正直あまり心を動かされなかったのですが、このように目と耳と鼻と皮膚で自然を感じながら動いてみて、改めて自然のために普段から行動を起こそう！！と考えることができるようになりました。

（トキ野生復帰コース　2 年女子）

・初めて入る田んぼにドキドキしていた。そうしたら思ってたより歩くのも土を掘るのも難しかった。けど私は虫が大嫌いなのでいっぱいいて凄くいやでした。一生懸命歩いている横をミミズが通ったりして最悪でしたが、終わったときの達成感が良かったです。

（トキビオトープコース　2 年女子）

・トキの巣のための枝を折る作業で、トキはどのくらいの長さがいいんだろう？とか葉がついているのとついていないのとではどちらが好きなんだろう？等を考えながら作業しました。（中略）私はまだ、野生のトキが飛んでいるのを見たことがありません。今回の加茂湖エコワークでトキに興味を持つことができたので、田んぼやビオトープのそばを通るときには、この辺でトキがエサを食べるのかな、と考えたり、トキを探したりしてみたいです。

（トキ野生復帰コース　2 年女子）

・私は伝統漁法コースでアサリとりや釣りの体験をしました。アサリ採りを始めてから 5 分、10 分と経ってもとることができませんでした。お店に売っているアサリをとった漁師さんたちは苦労しているんだなと感じました。また、酸素がないから砂の色が黒いということは初めて知りました。この 1 日はいろいろなことが学べました。

（伝統漁法コース　3 年女子）

・トキを守るためには、その周りの自然、そしてそこにいる生き物全てを大切にしなければ、本当の意味でトキを守るということはできないと思った。自然と接して自然を好きになれば、自然の保護につながると思った。

（トキビオトープコース　3 年男子）

・田んぼには思っていたよりたくさんの生き物がいました。それに種類も結構いたし、カニやカエルも普段見るより大きかったです。模様が入っているカエルは数倍キモチ悪かったですが、それをトキが好んで食べると聞いて余計イヤでした（笑）。でも、そういう生き物がいるから美味しいお米ができたりトキが住めたりするのかなとも思いました。加茂湖の周囲は思ったより汚れていて、臭いもくさくて少し残念でした。美化活動に取り組みたいです。

（生物調査コース　3 年女子）

・水田はどろどろしていた。最初、土は硬かったが、耕していくうちにすごく柔らかくなった。トキの生活に貢献しているのだと思うと嬉しくなったしまたやりたいと思った。佐渡の環境を知ることとトキのことを調べることは大きく関係していると感じた。調べたことをみんな

に知ってもらい、実行していこうと思う。

（トキビオトープコース　3年女子）

・初めてビオトープという言葉を知り、作ってみて、普段はあんな場所で活動することはできないし、話によると本当だったら裸足で田んぼに入るそうなので貴重な体験だと思う。自分たちの作ったビオトープは本当に小さいと思うけれど、トキのため、地域のためになったと思う。

（トキビオトープコース　4年男子）

・ビオトープを見たのも聞いたのも初めてだったので心配だったけれど、楽しく作業ができてとてもおもしろかったです。冬になって、トキが今回作ったビオトープに来てくれたらいいです。これから各地にビオトープを増やし、毎年放鳥を成功させ、佐渡や新潟だけじゃなく、日本全国の空にトキが飛んでいるようになったらいいなあと感じました。

（トキビオトープコース　4年女子）

・近海の魚が多くいるのは、海より湖で産卵した方が敵が少ないからだそうだ。魚、頭いいな。今回漁を教えてくれた人は昔より魚が減ったと言っていた。加茂湖の水質が汚染されているからだと思う。川や海にゴミを捨てないようにしたい。

（伝統漁法コース　4年男子）

・大きな生き物から小さな生き物まで、たくさんのいろんな生き物がすんでいました。田んぼの狭い生態系の中で一生懸命生きようとしているのを見て、人もこれを見習うべきだと感じました。今回も歩いている中でたくさんのゴミを見つけました。こういったことはとても無責任なことだと思います。人が他の生き物に食べられることはほとんどありません。でも他の生き物は弱肉強食の厳しい世界で生きています。今、私たちがすべきはそうした世界を壊さない努力をすることだと思います。「守ろう」とすると何かを必ず犠牲にしてしまうのが人だと思うので、「壊さない」努力をしていきたいと思います。

（生物調査コース　4年女子）

・タイコウチやミズカマキリはネットで数千円するので売ってみたいと思いました。ミズカマキリの捕食シーンが見られて自然の食物連鎖の実態を生で見ました。生きるということはこういうことだと改めて感じました。自分はこの食物連鎖の頂上に立っているので頑張ります。

（生物調査コース　4年男子）

・加茂湖の近くにはたくさんのゴミが落ちていてあまりいい気にはなれなかった。エコウォークの回数を増やせばその分だけゴミは減るし、環境のためになると思う。

（カキ養殖コース　4年男子）

・今回エコワークを体験して、私は生物のことを全然知らないんだと実感しました。いろいろな物に目を向け、音を聞き、実際に触ってみないとわからないことがあると学びました。佐渡の環境を知らずに環境は守れないことにも気がつきました。まずは普段通っている通学路に目を向けてみようと思います。

（生物調査コース　4年女子）

・ゴミ拾いも大切なことだけれど、やっぱり自分たちが加茂湖のことをより深く知らないといけないと思うので、今回のような生き物調査・水質調査などをカモケンなどの関係機関の方々としていきたい。

（生物調査コース　4年男子）

・一番感心したことは、この一目入道の昔話が今この現代まで語り継がれた意味を考えるとい

うことです。このような昔話をただの昔話で終わらせないで、なぜ現在まで語り継がれてきたのかと疑問を持っていくことはとても大切なものに気づくきっかけになると、今回のエコワークで学びました。

（一目入道コース　4年女子）

・エコワークのようにゴミを拾ったり加茂湖をきれいにしたりするのもとても大切だと思うけれど、その前にゴミを出さないようにするのも大切だと思った。毎日学校で配られる印刷物も裏が真っ白でもったいない。私には水を使いすぎる癖があるので、それももったいない。小学校でやった「リデュース水」という活動を思い出した。ものを大切にし、使いすぎず、そしてまだ使える物はすぐ捨てないで使おうと思った。

（生物調査コース　4年女子）

・今までのエコウォークでもたくさんの人が関わりましたが、今回のエコワークではさらにさらにたくさんの人々の力を借りました。桑子先生がいらっしゃらなくて残念でしたが、今回はハワイからトム先生とベン先生が来てくださいました。英語で会話をしたかったけれど、チャンスを逃してしまいました。初めて会う方がたくさんいましたが、「人々との偶然の出会いは人生の重要な一部である」ということを改めて学びました。私たち人間が、自然に興味を持てば持つほど、佐渡の環境は良くなるのだと思いました。

（伝統漁法コース　4年女子）

生徒対象アンケートからは、各質問で約8割～9割の生徒がこの取組によって郷土の環境に対する意識を高めることができたという趣旨の回答をしていることがわかる。佐渡の環境保全や地域のためにできることを3つ以上挙げられた生徒は 94%おり、具体的にできることを意識できた。エコアイランドを謳う佐渡市の一員として、生徒一人一人が環境保全について意識を高めている。

また、感想からは、実体験がもたらすものがいかに大きいかが感じられる。すぐ近くにありながら、感じ取ることのできなかった佐渡のよさを“体験”として自分のものにできたことが、この先の生活に色濃く生かされることを期待している。

地域の方や保護者、県内外の研究機関の方々からご協力をいただいて実施している本行事であるが、これをきっかけとして、今回興味を持った内容をより深く掘り下げていくことも重要と考えている。現在、本校科学部が不定期に加茂研の活動に参加させていただいている。自発的な研究テーマの設定など、一過性にならないような工夫をしていくことができればとも思っている。その取組をまた次年度のエコワークに生かしていくような流れができれば、よりよい活動ができるのではないかと思われる。

過去3年間の取組を通し、“郷土愛”の醸成が、生徒の人間的成長につながっていることがわかった。故郷佐渡の魅力を知り、佐渡中等教育学校で学んだことを誇りに思い、そこから日本に・世界に羽ばたく人材となってほしいと心から願っている。

(3)　今後の課題について

・一過性の行事で終わるのでなく、根本的な“郷土愛”につながるような取組にしたい。理科や総合学習などを中心とした日常的な取組の実施を検討していきたい。

・地域や島外の専門家との連携を継続し、密にしていくことで、より多角的な視点で郷土を知るてがかりとしていく。

・文化系のクラブ（例えば本校の科学部）による活動などで、本取組で提示されたテーマにさ

らに踏み込んだ研究や観察ができるとよい。さらに、日常活動の成果は外部の発表会などに応募することで、学校として、また部活動としての取組を出力し、他校への伝播も期待される。

(4)　その他

以下の文章は、新潟県理化学協会の平成 23 年度会報に担当者が寄稿した原稿です。全県の理科の関係者・機関に向けて、本校の取組を紹介することができました。

郷土に学び、感謝する

県立佐渡中等教育学校　**新野　貴大**

本校は開校 4 年目の中等教育学校であり、試行錯誤の毎日が続いている。生徒の進路希望は実に多様であり、進路・進学指導のあり方についても日々模索しているといった状況である。

さて、本校には中高一貫校ならではの多様な行事があり、様々な方法で生徒の意欲や知的好奇心の喚起に努めている。特色として、それぞれの行事に『郷土を知る』ためのエッセンスが散りばめられている点が興味深い。例えば、オンリーワンスクール事業の一環として取り組んでいるスクールカルチャーでは、全生徒が“能楽”を学んでいる。校内には「能楽室」という教室があり、自前の鏡板まで用意されている。専門家の指導を受け、伝統ある本間家の定例能でも発表の機会を設けるなど、なかなか触れることのない郷土の伝統芸能を深く理解する一助となっている。

その中で、理科を中心とした環境教育として『加茂湖エコワーク』という取組を行っている。本年で 3 回目の実施となったこの行事は、東京工業大学桑子研究室・兵庫県立大学豊田先生・加茂湖水系再生研究所（通称カモケン）・加茂湖漁協など多くの関係機関の協力をいただく本校の目玉行事でもある。新潟県最大の湖であり両津湾から海水の流れ込む汽水湖である加茂湖特有の生態系や、漁業の歴史・カキ養殖の現状・地域の伝説を体験して学ぶことから、休耕田を利用したトキのエサ場となるビオトープ作りや、トキ野生復帰センターのケージ内の整備まで、内容は多岐にわたる。生徒は地域の専門家や大学院生などの説明に熱心に聞き入り、フィールドワークを楽しんでいた。道中にはゴミ拾いを実施し、地域の美化活動も兼ねている。2011 年の秋には、放鳥されたトキが我々の整備したビオトープに実際に飛来したとの報告もあり、生徒の目を大いに輝かせた。

多角的に郷土を見つめ、郷土の自然を学ぶことで、それぞれに佐渡に生きることへの感謝と喜びを感じることが生徒の成長の一助となり、結果的に内外を見つめる大きな視野を持つことにつながれば嬉しい限りである。

この原稿を書きながら、私は自分の生まれ育った街のことをどれだけ知っているのだろうと、ふと考えさせられる。

他校への伝播

Ⅰ　取　組　状　況

1　伝 播 の 状 況

(1) 学校ホームページでの取組状況の紹介

・オンリーワンスクールの取組として、①「能楽」②「加茂湖再生」のページで取組を紹介している。

▲「新潟県立佐渡中等教育学校　ホームページ

ＵＲＬ　http：//www.sado-ss.nein.ed.jp 」を参照

(2) マスコミ取材と広報

・馬場あき子先生講演会における能楽発表の記事が新潟日報佐渡版(平成23年4月24日）に掲載された。

(3)報告会等

ア　学習発表会での発表

・学習発表会では、保護者はもちろん、地域の皆様、小学４・５年生と入学予定の６年生とその保護者、島内小学校・中学校・高等学校の教職員、能楽関係者に広く案内を出し、多くの参観者が集まった。

・学年ごと「能楽」披露

・加茂湖エコワークの紹介と感想発表

イ　全国中高一貫教育校研究大会　実践発表

「郷土愛を育むための教育実践―スクール・カルチャー「能楽」の取組」

ウ　特色ある教育実践校・園　論文（日本教育公務員弘済会　主催）

「郷土愛を育むための教育実践～スクール・カルチャー「能楽」と加茂湖再生プログラムの取組～」優良賞受賞

(4) 報告書の作成、他校への配付

・佐渡島内の小学校・中学校・高等学校、オンリーワンスクール研究開発校、県立中等教育学校等に配付。

新潟日報佐渡版（平成23年4月24日）

第3種郵便物認可

講演を終え、生徒からおれの言葉を受ける馬場あき子さん＝23日、佐渡市

絆ある関係 大切に

校歌作詞の馬場さん講演

佐渡中等教育学校

本紙読者文芸の短歌選者、馬場あき子さんが23日、校歌を作詞した佐渡中等教育学校の佐渡中等教育学校で講演され、「佐渡市の伝統で、校歌に託した思い」と題して講演した。

全校生徒や市民ら約千人を前に、馬場さんは校歌に触れ、「佐渡は昔から文化の深い所だから、で詩を作曲にした」と説明。歌の中の「時を告げつつ美しき絆となさん」については「友達と一緒に歩むことで、絆が生まれる。絆は成長していく上で大事なもの」と強調した。

能に深い造詣を持つ馬場さんは、佐渡の生活も詳しく解説。佐渡市が伝統に配慮され場所で講演と「金島書」を紹介し、「佐渡の人々は言いと歌に絆を深めていることに、佐渡市は感動した。そういう絆を持って皆さんを生きてほしい」と語った。

講演の前には、同校生徒が馬場さんを前に校歌を歌い、3年生がスクール・カルチャーで学んでいる能楽「羽衣」を演じた。講演終了後には馬場さんが、その証拠として絆を贈呈した。

同校4年の本間健士君は「ためになる話をたくさん聞いた。きょう聞いた話を胸に抱し生きていきたい」と話した。

編 集 後 記

この３年間、「オンリーワンスクール推進事業」の研究開発校に指定され、特色ある学校づくりに取り組むことができ、充実した活動ができました。継続してご支援いただけたことに改めて、関係各位に感謝申し上げます。

この事業の３年次の実践と成果、また３年間のまとめとして作成しました。スクール・カルチャー（ＳＣ）の取組は担当の源田が、加茂湖自然再生を考える取組は担当の新野が活動を振り返りながら、思いも込めてまとめました。３年間の本校の取組が多くの皆様に伝われば幸いです。

開校当時から進めているスクール・カルチャー（ＳＣ）の取組は随分認知され、地域の皆様や教育関係者から取組についてお褒めの言葉をいただくようになりました。今年度は４月の馬場あき子先生のご講演の後、お返しにと馬場先生と神主先生の幻のコラボ、仕舞「松風」は圧巻でした。とても得した気分でした。12月には仙台にお住まいの岸さんより、当校の能楽の活動を知り、手作りの立派な能面を10面寄贈いただきました。当校の情報が広がっていることを実感し、併せて応援してくださる方がいることに感動を覚えました。早速生徒に紹介し、能楽室に飾ることにしました。２月の学習発表会では舞囃子が２・３年生に広がり、囃子と舞が入るだけで能楽らしく見応えのあるものになりました。３月には中国江蘇省から学生が来校し、３年生が能の謡を紹介しました。学生たちは興味深く見入っていました。日本の能楽を広く伝える機会となり、訪韓研修での披露と併せて国際的にデビューできました。きっとこれから先もＳＣで学んだことがいろいろな場面で生かされると考えています。ここまでこれたのは、１期生の先駆的役割が大きく、２期生・３期生・４期生に確実につながっていると感じます。先輩の姿を見て目標にし、能楽に真剣に取り組んでおり、ＳＣが佐渡中等教育学校の大きな特色として形創られていることを実感し、感慨深いものがあります。

加茂湖自然再生を考える取組では、「加茂湖エコウォーク」から「加茂湖エコワーク」に進化し、マンネリ化を脱しより充実した参加型の活動になりました。ローカル・コモンズ研究所の豊田理事長さん、高田さん、そして地元の加茂湖水系再生研究所や加茂湖漁業協同組合の皆さん、行政の皆さん、大学生の皆さんのご協力で談義や加茂湖エコワークは大成功でした。生徒の佐渡の環境に対する知識や考え方は間違いなく深くなり、佐渡への愛着を醸成していると確信しています。

この場をお借りして、宝生流師範の神主先生、東京工業大学大学院の桑子教授、兵庫県立大学の豊田博士始め、「オンリーワンスクール推進事業」に関わってくださった多く皆様に、心からお礼申し上げます。

（ 教 頭　 加藤 雄一郎 ）

平成２４年３月２３日発行

発 行　新 潟 県 立 佐 渡 中 等 教 育 学 校　　校 長　竹内正文
NIIGATA PREFECTURAL SADO SECONDARY SCHOOL
〒952-0005　新潟県佐渡市梅津1750番地

編 集　オンリーワンスクール推進事業担当
加藤雄一郎　源 田 洋 平（ＳＣ）　新 野 貴 大（環境教育）
本宮智恵子　室 本 隼 人　小 林 健 美　鈴 木 教 道
福 島 昭 典　田 中 実 子　村 井 康 成　近藤美津子
長 部　賢　細 野　晃　松 村 博 生　田 島 阿 樹
菊 池 琢 麿　渡 辺 和 仁　佐藤紗和子　石川絵梨子
本 間　靖　湯浅笑美子